

永原先生のご退官に際して

君 羅 久 則

永原和夫先生は約30年間に亙って小樽商大に勤められ、このほどご退官になられました。その間25年間、同じ英語担当教官として御一緒させて頂いたものとして、謹んで一言、饒の言葉をお贈りしたいと思います。私が本学に赴任した時は脇田先生や北村先生が御健在の頃で、永原先生はまだ30代でいらっしやったと思いますが、英語教官の中では年代が一番近い（といっても一回り以上離れておりましたが）こともあり、また御専門も同じ英文学ということで、陰に陽にご指導を賜りました。先生はいつも若々しく気力体力に溢れ、エネルギッシュな方であり、ご退官の際にも、ご退官とは信じられないほどです。小樽商大の教官テニス部が創設されて間もない頃、北大との定期戦の第1回に先生と組んで試合に臨んだのですが、炎天下2時間に及ぶ大熱戦の3セットを戦い、本学に貴重な一勝をもたらしました。それ以後は3セットは中止になり、8ゲーム1セットにルールが改められたという大変な試合でした。しかし、ばて気味だったのは私の方で、先生にはさほど応えた様子は見られませんでした。

先生は次々と新アイデアを考え出される、アイデアマンとでもいうべき方で、平成3年に全国に先駆けて、言語センターを本学に創られました。この時はイギリスで在外研究のため、お力にはなれませんでした。この組織の企画、文部省との折衝などを精力的になさったと伺っております。また、英語教員を志望する学生のために、商業教員養成課程にゼミナールを開設することを提唱なさったのも先生です。学生の志望傾向ともあい俟って、それまではごく少数の学生しか所属しなかった同課程に今では定員を超える希望者がいるほどになりましたし、以来数多くの卒業生が北海道内を中心に教員として活躍しております。一方、そのような卒業生と教員志望の現役の学生を対象に

した、小樽商科大学教職研究会の発足にも尽力され、10回目を迎えた今、200名を超える会員を擁し、例年数十名の卒業生が集まって研究会を催すほどの規模になっています。また、ゼミナールの学生の指導のこともあって、高校英語の教科書の語彙を中心とした分析も手がけられています。パソコンを利用して網羅的に語彙や文法事項を調査研究しようとする、当時としては斬新なもので、これには共同研究者として参加させて頂きましたが、この研究はその後、汎く文学作品の分析や基本語彙集の作成などに発展しております。

思えば、先生は早くからコンピュータの利用を考えられ、まだ単漢字変換の頃から外国語実験実習室（現視聴覚教育施設）にコンピュータを導入され、以後、この施設の抱える多量のデータを管理するために利用し、検索や整理が省力化されています。また、マークカードを用いたパソコンによる成績分析処理のシステムにも発展しています。ラボ自体も数次に亘って大規模な改善をされ、現在あるマルチメディアを取り込んだ視聴覚教育施設の発案をされたのも先生でした。

学生の語彙分析の指導や、ラボの改修など、数々の新しいアイデアを出され、その多くが実を結び、具体的な成果となって現れています。その実現のためには大所高所からの判断が不可欠であるとともに、周到で綿密な検討や設計もまた必要になります。その結果、しばしば深夜まで、時間に追われながら作業を精力的にこなしておられました。このような時もばて気味なのはいつも私の方でした。

ご退官の後、永原先生は新しい大学作りに参画されておられとお聞きしていますが、以前にもまして、お忙しい毎日を送っておられることと拝察します。これからも尽きることのないアイデアとそれを支えるエネルギーを大切になさってますます活躍頂きたいと思います。先生の真のご退官はまだまだ遠い先のことです。ともあれ、小樽商大においては長い間本当にありがとうございました。